

16 学習者の動機づけ

母語獲得と異なり、第二言語あるいは外国語としての言語習得には個人差の影響が大きい。中でも「やる気」は学習の源であり、学習者の動機づけは早くから注目され、研究が重ねられてきた。ここでは、Dörnyei and Ushioda (2011) の分類に基づき、動機づけの理論を年代順に紹介し、学習者の「やる気」をどのように捉えるべきか概説する。

●社会心理学的アプローチ (the social psychological period)

最初期の動機づけ研究では、第二言語を異なる言語を使用するコミュニティとの交流を促進する媒介と捉え、**統合的動機づけ (integrative motivation)** と**道具的動機づけ (instrumental motivation)** という概念が提唱された (Gardner & Lambert, 1959, 1972)。前者では目標言語の文化や話者たちに近づきたいという気持ちが、後者では試験や就職といった特定の目的を達成したいという思いが学習動機となる。当初は統合的動機づけの重要性が強調されたが、現在までに両者は異なった動機づけの種類として捉えられるようになった。これらの研究は、学習者の情意要因に焦点を当てた先駆的な論考であり、言語学習には多様な要因が影響するという認識を深めた点でも意義深いものであった。

●認知・状況的アプローチ (the cognitive-situated period)

1990年頃になると、社会心理学的アプローチに対して新しい視点を導入すべきという意見が重なり (e.g., Julkunen, 1989; Skehan, 1991), Crookes and Schmidt (1991) による代表的な論考へとつながっていく。Dörnyei (2005) はこの潮流を認知・状況的アプローチと呼び、その特徴を以下2点に集約している。第1に、当時の心理学で隆盛だった人間の認知面に関する研究を、言語習得の動機づけにも応用するという視点である。このアプローチでは、学習で得られる利益や想定される困難等を学習者自身がどう認識するかが動機づけに大きく影響すると考える。第2に、各学習状況に合わせて動機づけを考察すべきという考え方である。統合的動機づけのようなマクロな視点では、教室場面ごとに異なるミクロな状況での動機づけを説明するのは難しい。

上記の潮流に基づき、この時期には、心理学における代表的な理論の影響を受けた研究も行われた。例えば、Noels, Clément and Pelletier (1999) はDeci and Ryan (1985) の**自己決定理論 (self-determination theory)** を自身の論考に取り入れてい

る。

●プロセス重視のアプローチ (the process-oriented period)

動機づけは常に一定の状態を保つわけではなく、時間とともに変容する。認知・状況的アプローチまでの大きな問題点は、これを考察できていない点にあつた。言語学習のように長期間を要する事象であれば、尚更この視点が重要になる。Williams and Burden (1997) は、動機づけの生起と維持のプロセスを区分し、時系列的変化の視点を導入した。また、Ushioda (1996) は、時系列に伴う個別で流動的な動機の変容を明らかにし、かつ動機づけへの影響因を幅広く考察する手段として質的研究の重要性を強調している。

●L2動機づけ自己システム (L2 Motivational Self System) と動機づけの潮流 (directed motivational currents)

現在、言語学習に関する動機づけ研究の主流として注目されているのが、**L2動機づけ自己システム (L2 Motivational Self System)** である (Dörnyei, 2009; L2は第二言語を意味する。ここでは専門用語の一部としてL2のまま表記する)。このシステムでは、**自己 (self)** に関する心理学の知見に基づき (Higgins, 1987; Markus & Nurius, 1986), 以下3つの要素から動機づけを説明している。(1) **L2理想自己 (Ideal L2 Self)** : 学習者が「こうなりたい」と願う理想的な自己の姿から生じる動機づけ, (2) **L2義務自己 (Ought-to L2 Self)** : 「こうあるべき」「こうなりたくない」という義務的、拘束的態度から生じる動機づけ, (3) **L2学習経験 (L2 Learning Experience)** : 学習内容、環境等に起因する動機づけ (例: 教材、教師、クラスメート、成功・失敗体験等)。

近年では、**複雑系 (complex systems)** の考え方、すなわち、あらゆる要素が多様に絡み合い、全体は部分の総和以上であり、直線的には理解し得ないという認識が言語教育にも大きく影響を与えていている。これに基づき、Dörnyei, Ibrahim and Muir (2015) は**動機づけの潮流 (directed motivational currents)** という視点を提唱している。動機づけのきっかけ、方向性を決めるための目標やビジョンを始発点として捉え、その後の長期的な動機づけの維持に基づく学習行動までを含めて表象するもので、その全てのプロセスに様々な要因が複雑に関係するとしている。

(安田 利典)